

第 33 回「ギブアンドテーク」(2013/5/19)

場所：スペインバル・リリオ (品川)

司会、文責：野田

参加者：15 人

要約：ギブする、テークする行為をどう受け止めるかと、ギブアンドテークが信頼に結びつく過程について議論しました。

内容：

1. 最初に、参加者に話したいことについて伺いました。
 - ・ 周りからいつもテークしている状況なので、自分から周りの人にギブをしたい。しかし、自分がギブ出来る価値が分からない。他の参加者に、自分自身がギブ出来る価値についてどう考えているかを聞いてみたい。
 - ・ 親から子への愛はギブするものである。子は親の愛のギブを期待していいものかについて考えたい。
 - ・ 親が子の養育をするなど、社会全体で、世代間でギブが行われる。世代間で次々とギブが行われ、子が親の介護をするなど、逆の方向のテイクが保障出来ない場合、ギブアンドテークと呼べるか。
2. ギブアンドテークの例
 - ・ 親が子に愛情を注ぐ場合、養育の形でギブを行っているが、子が喜んでいるさまを見るのは、親にとって何よりのテークである。子が何かをしなくても、ギブアンドテークである。
 - ・ ギブアンドテークには、功利的なイメージがあって、親子関係をギブアンドテークと表現するには違和感がある。
 - ・ 親、夫婦、恋愛、友情などとの関連性がある。
3. ギブアンドテークの行為そのものについての考察
 - ・ ギブも、テークも能動的であり、対称的でない。テークは受け取るという意味であるなら、受身の姿勢で受け止める場合は、レシーブである。
 - ・ 価値は受け取り手が決める。ギブ側にとって、価値は不確かである。
 - ・ ギブアンドテークで、与えるものと違うものが欲しいはずだ。
 - ・ 取引だと異なるものを交換する形だ。レシーブだと取引の感じはしない。
 - ・ ギブアンドテークは平等で、対等な関係が前提である。強者と弱者の間にはギブアンドテークの関係にならない。
 - ・ 産業が発達して物資が無尽蔵に入手できる近代以降に始めて、テークし続けることが出来るようになった。近代以前では入手できる資源が有限であるからギブアンドテークが他者との関係において重要となる。
4. ギブアンドテークと人間関係

- 人の行動の仕方が、制度の形で決まっていると、納得しやすい。ギブアンドテークは決まっていないため、色々考えてしまう。
- ギブされるだけ、ギブするだけの関係は不安である。バランスを取らないといけなような心理がある。一種の負債のようなもので、清算してゼロにしたい。
- 物品の、匿名の寄付にある種の不気味さを感じることもある。ギブする人とされる人との間に人間関係がなく、また、寄付を受ける人の状況を、寄付する人がどの程度知った上で寄付したか分からないため、どのように受け止めたらいいか分からない。
- ギブされると、喜ぶことを強制されるような気がする。
- プレゼントのやり取りなどが苦手である。相手を思っている熱量を量られているような気がする。
- 人間関係が深い、例えば親しい友達では、何かギブしたときに返ってこなくても構わない。
- 逆に人間関係が浅い場合、ギブアンドテークが成立しないと関係が壊れる。人間関係を人質に、強制する仕組みだ。
- 考えようによっては、人間関係の潤滑油として楽しむことも出来る。お菓子をシェアすることも、人間関係の潤滑油として楽しむ行為である。
- 人間関係が浅く、お互いの違いを把握していないときは、一般的な価値観で、等価なものを交換する。より深くなり、お互いの能力や好みの差がお互いに把握できるようになると、自分の能力を生かして、相手にとって価値のあるものをお互いに交換する。受け取り側にとって高い価値があるが、送り手にとってはたやすいものであるかもしれない。
- 信頼関係が出来ていないときに、お互いにギブアンドテークが繰り返されることで信頼関係ができる。信頼が深まると、一時的にギブだけしても信頼が壊れなくなる。とはいっても、ギブだけ、テークだけの偏りがおおきくなると、バランスを取りたくなる、自縛のような心理は残る。長年連れ添った夫婦のように、人間関係が更に深まると、相手と自分が同化するような感覚が生じるが、時々客観視することで、バランスを保つ。
- ギブが出来ていないと不安がある。他者にギブをすることで、自分の価値を確認することが出来る。他者へコントリビューション＝貢献することで承認を得たい。
- ギブしたい人がいるので、そういう人のギブは受け取ったほうが本人のため。
- ギブし、テークするものの価値について、価値の目盛りが客観的できちりしていると、交換したものが等価かどうかを気にして疲れる。主観的でおおらかに価値を評価することで人間関係がよりスムーズになる。

議論を通じて、ギブアンドテークが他者との関係の中でどのように位置づけられているか、他者との関係にどのように影響するかが浮き彫りになりました。